風林火山
戦国無頼

井上靖

戦国無頼　風林火山

井上靖

新潮社版

戦国無頼・風林火山

〈井上靖小説全集5〉

昭和48年6月15日印刷
昭和48年6月20日発行

定価 650円

© Yasushi Inoue, 1973.
Printed in Japan.

著者 井上靖
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一 電話
東京二六〇一一一一 郵便番
号一六二 振替東京八〇八
印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

戦国無頼　五
風林火山　二六三
自作解題　四一六

装画 加山又造

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

井上靖 小説全集 第5巻

戦国無頼

落城前夜

一

天正元年八月二十八日の中の刻（午後四時）に時雨がひととき烈しい雨脚を見せて、江北の山野を濡らして過ぎて行った。

小谷城の櫓の上から見ると、琵琶湖の湖面は雨が止んでからも長いこと眺望が利かなかったが、城を囲繞している平原と、その中に散在する幾つかの小丘陵は、その本来の色を取り戻し、雨雲の中から洩れている夕陽の箭を浴びて、小さい光の粒子の集合体のように美しく光り輝いていた。

城の直ぐ南方に坐っている姫御前山には敵織田軍の本営があるはずだったが、何十本かの旌旗が秋半ばの八分通り紅葉した樹間に静かに覗かれるだけで、人っ子ひとり動く気配はなかった。

その姫御前山の西斜面の裾をかなり広い地帯に亙って薄か尾花か知らないが、そんな秋草が埋めて、その穂がいっせいに時々きらっと白く光った。不思議に合戦のなかった一日は暮れようとしていた。

立花十郎太はいつまでもうっとりとこの暮れ方の風景に見入っているように見えたが、実のところそんな心の余裕は持ち合わせていなかった。彼の髯面の中で、両の眼は一箇処に固定したままらんらんと輝いていた。彼が幾多の戦場で、敵方の名ある武将の首だけを心掛けて、まるで人混みでも避けるように、各所の小競り合いを避けながら一際目立つ旗差し物へと突進して行くその時と同じ眼をしている。功名手柄になる大物はいないかと、乱戦のまっただ中で、これはと思う武将を物色している時と、ちょうど同じ熱っぽい眼である。

十郎太は一箇処に固定した眼を、暫くすると他の場所に移動して行った。一見すると静かな風景だったが、その静けさの中に、蟻の這い入る隙もないくらいに、織田軍は十重二十重に、裸同然のこの小谷の本城を取り囲んでいるはずであった。ここから脱出することは容易なことには思われなかった。夜陰にまぎれて細かい網の目から洩れ出る以

外術はなかった。どうしても助からねばならぬと十郎太は思った。おめおめこんなちっぽけな城に義理立てして一命を棄てるようなことがあってなるものかと思う。何も討死するために武士になったのでもなければ、浅井家に仕官したのでもない。どんなことがあっても生きるだけは生き抜かなければならぬと思う。

十郎太はもう半刻以上、櫓の上の見張りの役目に当ったのを利用して、自分のこの世に一つしかない生命の糸が、途中で決して断ち切られることなしに無事に琵琶湖畔まで延びられる道を、不敵な顔に似合わず神経質に探しては検討し、探しては検討しているのであった。

決行するのなら今夜だと思う。併し、和議が必ずしも絶望というわけではなかった。今日一日寄せ手が取りかかって来ないのは、なんらかの交渉が敵方と本丸との間に行われていると考える他はない。もし和議が成立して、合戦がこのままで終るというのならば、今までの数々の戦場における功績をご破算にして、今この城を棄てることはないのである。

併し、もしその頼みの綱が切れて、戦いがこのまま続けられるというのならば、この城の生命はもう旦夕に迫っている。一気に敵の大軍に平攻めに攻め立てられれば、三日はおろか、まごまごすると一日の生命である。そうなれば城を棄てるのは、さしずめ今夜を措いてはないわけであった。

籠城ということは考えられなかった。と言うわけは、現在この小谷の城そのものがすでに半身不随であった。城主長政のいる本丸と、長政の父久政のいる二の丸との間の中の丸は、すでに三日前に敵手に落ちていた。そこを固めていた浅井政澄、三田村国定、大野木秀俊等の諸将が敵方へ降って、中の丸へ敵方を引き入れているからである。籠城して脱出の機を窺うというような悠長な今日の情勢ではなかった。

「一国の滅びるのは早いものだな。まるであっけないのう」

いつかそこへ上がって来ていた鏡弥平次が、突然口を開いた。

「亮政様から御三代、浅井家ももうおしまいじゃ。逃げたい奴は今夜逃げるんだな」

十郎太ははっとして、弥平次の顔を見た。自分の心を見透かされたように思ったからである。房のついた長柄の槍をしごく時、弥平次は無表情である。表情があるかも知れないが、顔一面の痘痕と二本縦に顔を刻んでいる刀の切り傷が、彼の顔からいかなる内面の意志をも消してしまっている。もちろん、今も弥平次は無表情である。頬髯の半分

白くなっているこの中年の武士を、十郎太はその槍の無双の腕前と一緒に、何を考えているか判らぬ男として、常々不気味に思っている。

「貴公、討死か」

十郎太が訊くと、

「そうさのう、人間死場所が大切じゃて」

それから、弥平次はじろりと十郎太をねめつけておいてから、

「俺も逃げるか！」

後は、うわっははは、しゃがれた異様な笑い声を十郎太に吹きつけた。

その時、いつかその一部を見せている湖面の上を、名も知らぬ小さい鳥の大群が、塵のように固まって南から北へ移動して行くのが見えた。

「何にしても淋しいことじゃ、今年の秋は！」

そう言い棄てると、また、異様な笑い声を辺りに不作法に響かせながら、弥平次は櫓を降りて行った。

二

今日巳の刻（午前十時）、織田軍よりの使者として不破河内守が本丸へやって来たという噂が夕刻から城内に広まった。そしてその使者の持って来た講和の内容までもしやかに伝えられた。――信長は長政になんの遺恨も持っていない。長政が越前の朝倉氏に義理立てして信長に反抗したその間の事情はよく判る。併しすでに朝倉氏が滅亡してしまった現在、いたずらに意地立てして信長と事を構える意志はあるまい。城を明け渡してくれれば、もともと姻戚関係にある両家のことだから信長は決して悪くは取り計らわない。――大体、こういった使者の口上だったと言うのである。

この噂はどこからともなく伝えられ、忽ちにして城内に広まり、武士たちのせっぱつまった心理に微妙に作用した。誰も彼もの表情は急に明るくなり、暗い陰鬱なものが冷たく渦巻いている城内に一条の光が差し込んで来た思いだった。

こうした噂は単なる噂としてではなく、十分に真実性をもって人々に受け取られた。城主長政の奥方お市の方は信長の妹であって、信長と長政は謂ってみれば義理の兄弟の仲であり、両家の間に事を構えるような直接の原因は、もともと何も考えられなかったのである。噂の通り長政が信長に弓矢をひいたのは、信長が長政になんの申し入れもなくて、浅井家と多年親密な関係にあった朝倉氏に戦いを挑んだためである。そして合戦は長政の反対を押し切って、

長政の父久政の天下の形勢を弁えぬ老人らしい一徹な義理固い考え方から起ったことであった。

もちろん、久政とてこうまで短時日に信長のために窮地に陥れられようとは想像していなかったろうが、姉川の一戦に浅井、朝倉連合軍は振わず、一度和議は成ったが、その後二、三年の間に領土は徐々に織田軍のために蚕食され、ついに頼みと思った朝倉家は滅亡し、浅井家は忽ちにして今日の悲運を迎えるに到ったのである。だから信長の使者が本丸に入ったということは、この小谷城が灰燼に帰すことから免かれ得る最後のただ一度の機会の到来を語っていた。

日脚の早い秋の陽が落ちて、城内に夕闇が立ちこめる頃、あたかもこの噂を裏書きするように幾つかの名酒の樽が天守の下の貯蔵倉から運び出され、城内の広場に移された後、残りの樽全部が櫓々の武士たちの所へも持ち出された。

やはり和議が成ったのだという楽観的な空気が辺りを占めるのに不思議はなかった。これで城も助かるし、自分たちの生命も助かるという気分が誰彼の心にもあった。武士たちは昨日までの戦いの疲れで、おかしいほど酒に弱かった。そして忽ちにして荒々しい放歌高吟が各所に樽を囲んでいる集団から沸き起った。

浅井が城を茶の子とおしゃる
赤飯、茶の子、強い茶の子
信長どのは、橋の下の土亀
ひょっと出てひっこみ
ひょっと出てひっこみ
もっとも、一度出たら、首とろ

何人かが和して呶鳴るそんな歌が聞えていた。これは去年の夏、大嶽の城を挟んで両軍が対峙していた頃、織田軍の若い者たちが「浅井の城は小さい城や、ああよい茶の子、朝茶の子」と城の小さいことを揶揄したのに対して、浅井方でそれに応じて唄い返した歌であった。

この歌声が流れて来ると、城内の人々にはなんとも言えぬ感懐が湧き起った。一年前はまだこのような歌が唄われる余裕が小谷の城下にもあったのだと、口には出さないが、しんみりした思いに打たれた。そして今更のようにこの一年間に、遮ることのできぬ速力で没落への坂を一気に転がり落ちた主家の悲運に眼を見張る思いだった。ともあれ、戦いが恐らく今日で打ち切られるだろうという頗る楽観的な観測は、若い武士たちを少し異常な行動と浮き浮きした気分に駆り立てていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

足に刀傷を負っているびっこの武士が、具足をつけたまま手槍を杖にしてでたらめな踊りを踊っている向こうでは、首桶に腰を降ろして謡曲を謡っている若い武士があった。篝火の光の加減で、その顔は花のような紅潮した美少年の美しさにも、また死に瀕している少年の苦痛に堪えている蒼ざめた顔にも見えた。四辺の喧噪で、その少年の声は少しも聞えなかったので、固くてきびしいその表情の動きは、彼をそのような異なった二つのものに見せているのであった。

そうした無秩序な酒宴の狼藉が暫く続いていたが、新しい第二の噂が、これらの武士たちの酔いを奪い去るためにやってきた。それはひどく無慈悲に、無造作にやって来た。明日払暁を期して、奥方お市の方と三人の幼い姫たちは織田方へ引き渡される。それを合図に両軍の間に最後の合戦が始まるだろうというのであった。

そしてこの新しい噂が、武士たちの気持をぎょっと立ちすくませたと殆んど同時に、城内からも、明日の一戦に遅れを取らぬように休息すること、但し今夜は無礼講であるから元気な者は夜を徹して飲んでもいいという達しがあった。

誰一人休息するものはなかった。

酒宴はそのまま続けられて行ったが、一時は誰に限らずひどく無口になり、篝火の音だけが夜の闇にはじけていたが、やがて先刻とはまるで変った狂暴なものを内に孕んだ酒宴の騒擾に変って行った。

人々の顔まで一変したようだった。どの顔もどの顔も、どす黒い皮膚の上に肋がぎらぎらとのって、両の眼は座って、わけの判らぬ咆哮が醜い口もとから飛び出していた。

南北隅の櫓の下で、脇坂八左衛門の部下の武士たち十数名が一団となって樽を囲んでいた。その一座の中央に坐っていた鏡弥平次は、

「注げ」と隣の武士に、大きな酒盃へ柄杓でなみなみと酒を注がせると、中腰になってそれを捧げるように両手で持って、顔へ近づけて行くと、ぐびぐびと喉を鳴らしながら二息か三息でそれをあおった。そして酒盃をやや仰向いた顔の上に倒まに伏せると暫くそうしていたが、やおら顔を起したと思うと、ぎゃっという夜鳥の鳴き声のような声を出すや否や、一閃、酒盃を遠くへ投げた。酒盃は広場のあちこちを埋めている武士たちの幾つかの集団の上を飛んで、やがてどこかで物に当って砕け散る音がした。

「貴公、城と共に討死するか。逃げるなら今のうちじゃ、言え！」

そう呶鳴った弥平次の痘痕と刀傷でめちゃくちゃな顔は阿修羅のようだった。到るところから血でも吹き出してい

そうに見えるのは、酒が顔に出ているからであろう。
弥平次の視線は食いつくように、立花十郎太に向けられていた。
「もとより、城を枕に討死する」
十郎太は探るような視線を弥平次に向けていたが、やがて静かな口調で言い切った。
「貴公は？」
弥平次の視線が、その隣の武士に投げられた。
「この期に及んで――」
「貴公は？」
「主君には馬前に死なねばならぬお情けを戴いている」
「よろしい、次に貴公は」
弥平次は順々に、不気味な痘痕面を一団の武士たちに向けて行った。
誰一人逃げるという者はなかった。もっともこうした場所で、そうした卑怯な言葉を吐けるはずのものではなかった。
「ふうん！」と軽蔑か感嘆か判らぬ嘆声を洩らすと、弥平次は、
「疾風、お前はどうじゃ」と、最後に、先刻から黙々として独りで酒を飲んでいる若い武士に言った。
若い武士は、じろりと弥平次の顔を一瞥しただけで何の返事もしなかった。
「言え！」
弥平次は二、三歩近づいて行くと、その顔をのぞき込むようにした。
「逃げるか、討死か、逃げるなら逃がしてやろう、のう、疾風」
すると、佐々疾風之介は、
「俺か、俺は逃げん。併し死ぬのは嫌だ。貴公と違って、俺は仕えてから三年にはならんからな」
と不敵に言い放った。
「なに！」
弥平次は唸るように呻いたが、それと同時に、一座の武士たちの視線がいっせいに疾風之介の顔に集まった。
「俺は主君には十分ご恩返しはしてあるつもりだ。できれば生命だけは助けてもらいたいな。ちっぽけな城が落ちるたびに死んでいては、人間生命が幾つあっても足りなかろう」
この最後の言葉が、一座の、それでなくてさえ興奮している武士たちを刺戟した。武士たちは憎しみをこめて疾風之介をにらみつけていたが、誰一人声を上げる者も、立ち上がる者もなかった。自分だけで疾風之介に挑んでゆく自信はなかったからである。

ここにいま集まっている脇坂八左衛門の部下である十数名の一団は、浅井の家臣の中でも名うての豪の者ばかりであった。姉川の役以来、この一団の武士たちによって上げた首級の数はたいしたものであった。彼等は乱戦になると、いつも蜘蛛の子を散らすように、思い思いの方向に散らばって行った。そして言い合わせたように、幾つかの首級を提げて帰って来た。

併し、こうした連中のなかでも、佐々疾風之介は一人なんとなく別格に考えられていた。殆んど他の全部の者が、生命知らずの豪胆と、幾度かの合戦で自然に習得した自己流の剣法が身上であるのに反し、疾風之介だけが、ちょっと勝手の違う剣の使い方を見せていたからである。

刀を抜き合わせて身構えられると、ええいと生命をどこかへ抛り棄てて一か八か強引に武者振りついて行けるような相手ではなかった。去年すなわち元亀三年三月、横山城の攻撃戦の時、十数人で囲んで打ち果せなかったずば抜けて強い相手を、疾風之介が、一、二回合わせただけで、袈裟がけに斬って棄てたその刀の冴えは、並みいる武士たちの眼を見張らせたもので、その時の水際立った疾風之介の太刀捌きは、現在も誰の眼にもある不気味さで残っていた。

十郎太は、臆せずはっきりと死にたくないと言い切った佐々疾風之介の顔を窺うようにしてみていたが、自分と同じ考えを持っている自分より二つ三つ若い武士をたのもしく眺めた。この城を脱け出すなら今夜である。遅くも明日の払暁までである。夜が明け切ってしまえば、事は面倒になる。何とか彼と謀し合わせて、脱走の機会を掴まねばならぬと思った。併し、

「ちえっ、卑怯な奴めが！」

と、彼は口では、心と反対の事を一座に聞えるようにさもさも憎々しげに言い放った。その時である。

「疾風、立て！」と弥平次が吼えた。

「鏡弥平次が、この槍で人非人を成敗してやる！　立て！」

彼はもう槍を掴んで立ち上がっていた。一座の者たちには、その時の弥平次の形相が火焔の中に立っている不動のように見えた。並みいる武士たちはどうなることかと固唾を呑んだ。

弥平次が顎をしゃくって、地面に影を大きく揺らせて、篝火の光の輪から暗黒の中へ吸い込まれて行くと、佐々疾風之介も太刀を提げて立ち上がり、彼の後を追って出て行った。

「どちらか死ぬだろう、莫迦な奴らだ！」

立花十郎太は言った。

三

漆黒の闇の中で、白い槍の穂だけが冷たく宙に浮いて静止していた。その白いものから一間ほどの間隔を置いて、疾風之介は刀を正眼に構えて息を詰めていた。

暫くの間、二人は微動だにしなかった。

やがて槍の穂先は軽く動くと、それにつれて疾風之介は、その白い穂先を中心にして半円を描くように体の位置を少しずつ移動して行った。

ようやく二つの息使いが荒くなった。

白い穂先が横に閃いたと思うと、次の瞬間、電光のようにそれは前へ突き出されて来た。

「疾風！」

弥平次の太い声が耳もとでした。気が付くと、疾風之介は弥平次の手もとに飛び込んでおり、真ん中に槍の柄を挾んで二人は体をぴったりとつけて対い合って立っていた。そして疾風之介の刀を持っている手首は、岩のように頑丈な弥平次の手に摑まれていた。

「なるほど恐ろしい腕を持っているな。これではこの城と一緒に死ぬのは惜しかろう。どんなにも出世できるはずだ。まごまごしていないで、このまま、とっとと失せろ」

そう言ったかと思うと、槍の柄が二人のうちどちらからともなく、おたがいに押し返され、二人は背後にぱっと跳びのいた。

槍の穂先が暗い中で天に向かって直線に立った。疾風之介はかちりと鍔音をさせて刀を収めた。

その時、疾風之介は初めて弥平次を恐ろしい相手だと思った。あのまま果合を続けていたらどっちがどうなっていたか判らぬと思った。

「このまま城を脱け出せ」

「貴公はどうする」

疾風之介は初めて口を開いた。

「俺か、俺は城を棄てん。主家には三代に亙っての恩義がある。城と共に相果てるつもりじゃ。槍の穂先がぼろぼろになるまで、突いて、突いて、突きまくってのう」

「俺も今夜は逃げん、城が落ちるまでは踏み留まっている」

「そんな事をすれば討死するばかりだ」

「血路を開けるかも知れん」

「莫迦なことをするな。無益というものだ。どうせ生命を棄てぬつもりなら、今夜のうちに落ち延びることだ」

「俺は逃げん」

疾風之介はまた言った。疾風之介はこの城と共に一命を

棄てる気はなかった。明日落ち延びられないと知れば、つい先刻までなら、あるいは夜のうちに闇にまぎれて落ちたかも知れない。併しこの痘痕面の槍の弥平次から落ちろと言われると、何故か落城前夜のこの城を脱け出す気にはなれなかった。自分はあるいは、この明日の合戦で生命を棄てる覚悟でいる弥平次に惹かれているのかもしれないと思った。

真実、二君に仕える気のない弥平次をむしろ疾風之介は羨ましいと思った。自分もそうした城を、そうした主君を持つことができたらどんなに幸せだろうと思う。生命を棄てることが商売の武士のくせに、生命を棄てる気にならないとは何という呪われたことであるか。兎に角、そうした主君に巡り会えるまで自分は生きのびなければならぬと思う。正直に考えてさして命は惜しくないようだ。と言って、無駄に死にたくはない。死んでも何も心残りのない満足な死に方をしたい。

「もう一度言うが、明日になると、生命はないぞ」

弥平次はそう言い棄てると、再び櫓のほうへ重い足音を立てて去って行った。

（それに俺にはもう一つ仕事がある）と、この時疾風之介は思った。中の丸を隔てて本丸のほうの情勢は想像つかなかったが、そこにやはり自分たちと同じ明日を持って、一人の女性が、生きているはずであった。そして、その女性の運命を見届けたい気持が、自分のいまここを脱け出し得ない心の底に根強く横たわっていることに気付いた。

「疾風か？」と、暗がりから声がかかった。

「誰だ！」

「立花十郎太だ」

十郎太は近寄って来ると、しばらく黙って立っていたが、辺りでも窺っていたのか、

「誰もいないな」と言った。

「誰もいない、俺一人だ」

「弥平次はどうした」

「いま帰って行った」

「殺らなかったのか」

「それどころか殺られたかもしれない」

それから、やや間を置いてから、

「あいつは、いい男だ。明日殺すには惜しい奴だ！」

と疾風之介は感深げに言った。

「誰もいないな」

もう一度念を押してから、十郎太は急に声をひそめると、

「一緒に今夜城を脱け出そう。二人一緒なら何とかなるだろう」

と言った。

「俺もこんな城の犠牲になりたくない。何年か無駄働きをした。併しあながち無駄にもなるまい。今度はお互いに新規蒔き直しにやりなおすことだな。脱け出した後のことは俺が考えている。俺に任せろ、悪いようには取り計らわないつもりだ」

疾風之介はそれに対して返事をしなかった。彼には初めから、十郎太が城と共におめおめ討死する男ではないと目星をつけていたが、案の定そうだったと思った。なるほどこの男も考えてみればここで殺すのは惜しい。

大物の首ばかり狙って、戦場をうろついているこの男の眼が、疾風之介はあながち嫌いではなかった。雑兵が来ると避けて、功名首ばかり物色しているこの男のらんらんと血走った眼は、この男のただ者でないことを示している。以前は浅井と仇敵の間にあった六角氏の配下だったという噂があるが、主を乗り換えることぐらいは自分の一身のためにはやりかねない男である。確かに六角より浅井のほうが少しはましだった。

少なくとも昨日までは。——併し、不運な男だなと思う。

「俺は貴公と逃げるわけにはゆかぬ」

「何故？」

「俺は他に一緒に逃げなければならぬ奴がいる。女とな」

疾風之介は言った。

脱走

一

本丸で、明払暁、織田方に引き渡される奥方お市の方に付き添う二十何人の女中たちの銓衡が終り、上からそれぞれの者に申し渡しがあったのは、もう初更（午後八時）を過ぎた頃であった。

加乃は、その夜、本丸から退がって伯父山根六左衛門の屋敷に居たが、急のお呼び出しで、急いで奥へ伺候してみると、思いがけない上からの御沙汰であった。

他の女中たちは、いずれも申し合わせたように、殆んど表情というものを殺した冷たさで、頭を下げて「は」と素直に低く答え、そのまま頭を上げようとしなかった。命令を伝えた老武士杉山三郎の猫背の後姿が広間のほうへ消えると、女中たちは一瞬前とはまるで違った顔を上げた。

誰もお互いに一語も言葉を交わさず、遠くのほうに見入っている面持だった。悲しげではあったが、不思議に暗さはなく、今ひどく落ち着いた静かなものが彼女らの心に舞

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c